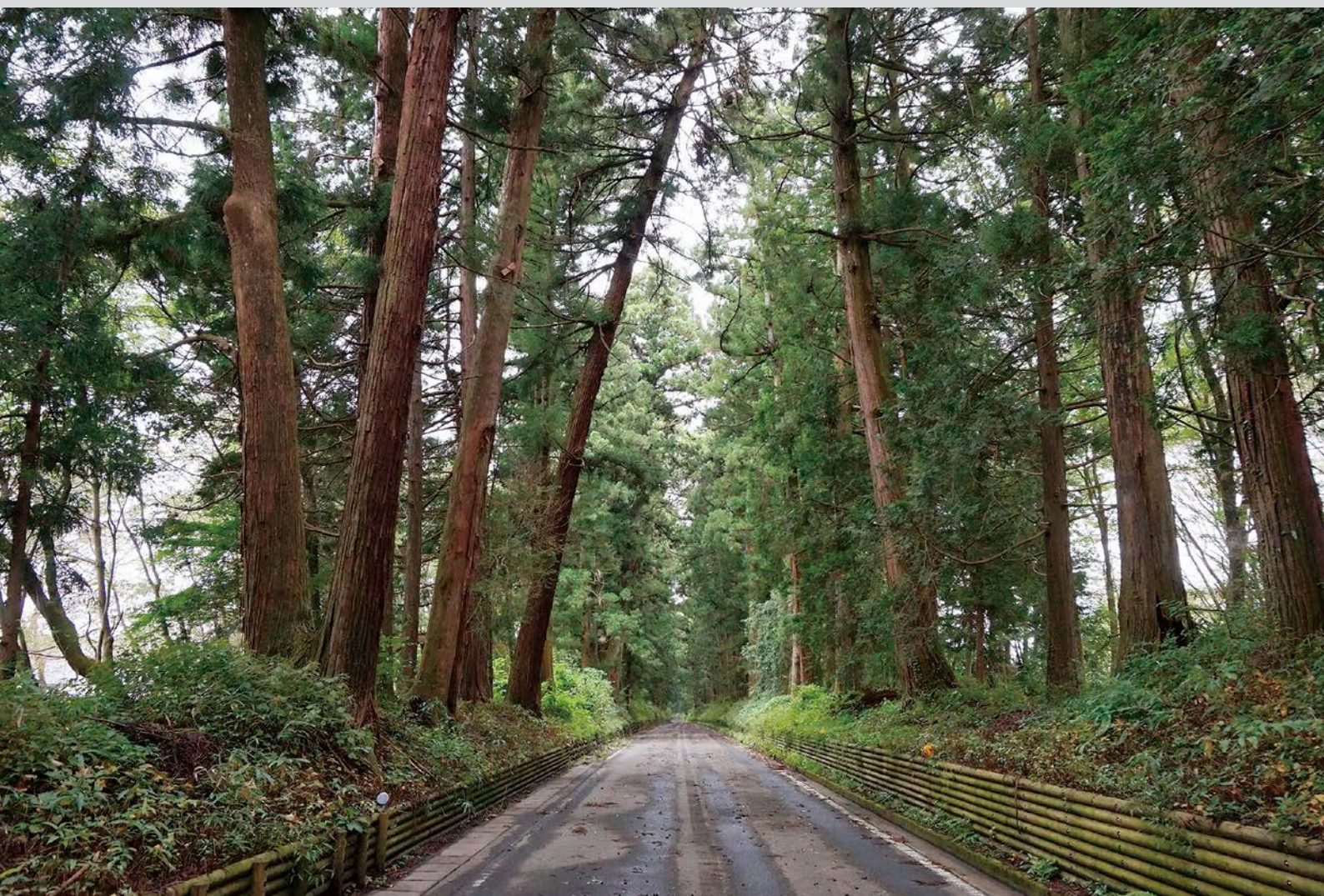


こんにちはコミュニティ
Community



特集

コミュニティカレッジ 2019

— NPO法人 きらりよしじまネットワークに学ぶ —

Vol.
115
March
2020



『地域防災力を高めるために』

令和元年9月21日(土)に、日光市土沢公民館において、土沢自治会自主防災勉強会が開催されました。この勉強会は、当協会の「講師・助言者派遣事業」を利用して開催されたものです。

「地域防災力を高めるために」をテーマにNPO法人栃木県防災士会理事長の稲葉茂氏にご講演いただきました。

また、「身近なもので防災グッズを作る」ということで、新聞紙でスリッパを、ゴミ袋でレインコートなどを作りました。

災害時には、断水や停電が起きたりして物資が不足します。日用品で代用品が作れると、いざというときに役に立ちます。

参加者の皆さん、熱心に稲葉先生の話に聞き入っていました。

『奇跡の集落』

長崎市太田尾町山川河内(さんぜんごうち)地区で、江戸時代末期の万延元(1860)年大規模な土砂災害が発生し、33名もの人が死亡しました。以来、この災害の犠牲者の供養と災害の教訓を語り継ぎ、災害を忘れないために、月命日の14日に、まんじゅう等を持ち回りで全戸に配る「念仏講まんじゅう」の風習が約160年続いています。

299名もの死者・行方不明者を出した1982年の長崎大水害の時、山川河内地区でも家屋6棟が土石流で流失・損壊しましたが、住民は自主避難等により、全世帯173名(当時)は、奇跡的に無事でした。

この風習は、住民が土砂災害から身を守り、地域の絆を育み引き継いでいる事例の一つです。

『先人の知恵の共有』

～山川河内地区に残る言い伝え～

- 家の裏の石垣の間から泥水が出る
- 枯れ草のにおいのする泥水が流れ出す
- 過去に土石流などの被害を受けた川筋には家を建てる
ない
- 高台に避難する



【表紙の写真】 日光杉並木街道

日光杉並木街道は、日光街道、例幣使街道、会津西街道の三つの街道からなる総延長3.7kmにも及ぶ、日本が世界に誇る並木道であり、国の特別史跡・特別天然記念物の二重指定を受けた貴重な文化遺産です。

並木杉は、徳川家の家臣であった松平正綱、正信親子2代により、日光東照宮への参道にあたる3街道に約20年あまりの歳月をかけて植えられ、東照宮に寄進されました。

車社会の進展や街道周辺の開発による樹勢の衰えなどにより、並木杉が減少し続けています。近い将来杉並木の見事な景観が失われてしまう恐れがあるとして、保護活動も盛んに行われています。



代用品づくり



簡易オムツ



ゴミ袋で作るレインコート



新聞紙で作ったスリッパ

『地区防災計画について』

従来は国と都道府県、市町村のみが防災計画を策定する枠組みでしたが、2013年の災害対策基本法改正で新設された制度。住民自らが地区の状況に応じた計画を定めます。

東日本大震災で行政も被災し、機能が麻痺した教訓から、自発的な防災活動で地域の防災力を高める狙いがあります。

地区防災計画を活用して、地域コミュニティごとに効果的な防災活動を実施できるようにすることが重要です。

『被災した人が伝言を録音し、それをどこからも聞くことができる“災害用伝言ダイヤル”は何番をダイヤルすればいいでしょう？』

災害用伝言ダイヤルは、災害発生に備えて利用方法を事前に覚えていただくことを目的として、体験できる機会があります。

■体験利用提供日：毎月1日、15日、正月三日、防災週間（8月30日9:00～9月5日17:00）、防災とボランティア週間（1月15日9:00～1月21日17:00）

■提供条件がありますので、NTTなどのホームページをご確認ください。

答え：171

防災クイズの中の問題より



稲葉 氏



命を守る防災クイズ

3択クイズ10問に全部答えられるかな？

私たちがコミュニティづくりに協力しています

『できる親切はみんなでしょう それが社会の習慣となるように』

「小さな親切」運動栃木県本部

代表：菊池康雄
事務局：栃木銀行 経営企画部広報文化室
住所：宇都宮市西2丁目1番18号
TEL：028-633-1241（代）



特集 コミュニティカレッジ2019

「NPO 法人 きらりよしじまネットワークに学ぶ」

地域のコミュニティリーダーの養成を図り、コミュニティづくりの振興を図ることを目的として開催しているコミュニティカレッジ（一般社団法人とちぎ市民協働研究会委託事業）ですが、今年度は、「NPO 法人きらりよしじまネットワークに学ぶ」をテーマに、とちぎボランティアNPOセンターぽ・ぼ・らで、11月29日（金）から2月14日（金）まで全4回の日程で実施しました。

（一社）とちぎ市民協働研究会代表理事の廣瀬隆人氏と、専務理事・事務局長の土崎雄祐氏をコーディネーターに迎え、毎回、たくさんの意見交換をしました。

地域で同じ活動をしている者同士、抱えている共通課題があります。受講生に繋がりを得てもらい、今後、ご自身の活動に生かしていただければと思います。みなさんが地域に戻って活躍していただくことを大いに期待しています。



廣瀬 氏

NPO 法人 きらりよしじまネットワーク

山形県東置賜郡川西町吉島地区の全世帯が加入するNPO法人きらりよしじまネットワーク（以下、「きらり」）は、自主防災事業、介護予防と生涯学習事業、子育て支援・青少年健全育成事業などあらゆる分野の地域事業を住民主体で取り組み、若者も積極的に関わる新しい住民自治のカタチで注目を集めています。

第1回カレッジ ◆ 11月29日（金） 「きらりに触れる」

先進事例を学ぶ？

山形県川西町吉島地区は、ごく普通の農村地域ですが、その地域がどのように活性化したのか学びます。ただ、一般的な先進事例なるものを聞いて参考にするという学び方ではありません。先進事例を聞いても、自分の地域で同じ事はできません。「きらり」の実践を細かく丁寧に分析しながら、その活性化の要因を部



品に分けて、そこから使えるノウハウを導き出し、自分の地域で使えるようにしたいと思います。

かなりハードなプログラムですが、皆さんと交流しながら学習効果を高めていきたいと思えます。

活き活きと地域活動に参画する 住民の笑顔

各グループで自己紹介や地域での悩み、なぜこの研修に参加したのかなど情報交換をしたあとに、「きらり」を紹介

したDVDを鑑賞しました。

”きらり”は子育て支援や高齢者の社会参加促進など地域づくりがすべて住民の手で行われています。そのまとめ役を務め、自立した体力のある自治再生に取り組む高橋事務局長の姿と、活き活きと地域活動に参画する住民の笑顔を映しています。

DVD冒頭で吉島地区の住民が「”きらり”ができるまでは、住民同士の会話が少なかった・・・、ふれあいが多くなつた。それが変わった」と話す姿はとても印象的です。

”きらり”の映像を見て気づいたこと

”きらり”の映像を見て、気づいたことを書き出し、グループの皆で気づいたことを共有します。

- 若い人の出番をつくっている
- お年寄りの笑顔が活き活きとしていてステキ
- 地域のものは全てが資源。そこに付

加価値をつける

○子どもから高齢者まで積極的に地域に参加している

○会話がコミュニケーションを豊かにしている

映像の中で気づいて欲しいことは、高橋事務局長が高齢者だけでなく、子ども達一人ひとりに話しかけ、会話をしていることです。高橋事務局長だけでなく、”きらり”のスタッフも普段から一人ひとりの子どもに丁寧な話しかけ、コミュニケーションをとっています。

地域づくりとは人と人をつなげる

自分さえ良ければよいという風潮が広がり、町内会費の納入もままならない住民が増加、地域の住民がまとまる力を失っている、というのが地域の現状です。

人口減少、少子高齢化の中この現状を放置しておく、防災機能の低下、孤独死・無縁死の増加、互助機能の衰退を招

き、地域住民が幸せになることはありません。

地域づくりとは、人と人がつながり、知人や友人を増やす活動です。

人と人は、楽しいこと・うれしいこと・面白いこと・美味しいことなど『食べ物・地名・人』の共通点でつながれます。

地域住民が幸せになるためには、お互いに助け合える人間関係のコミュニティをつくることなのです。



土崎 氏



DVDを見て気づいたことを皆で共有した後は、

●リーダーシップを育むコツは？

●若者が参加する秘訣は？

●活動を支える資源をどう集めているか？その工夫は？

という3つの課題を、各グループに分かれて、テキストを読み込みながら方策を探し出します。

●リーダーシップを育むコツ

”きらり”では「決めない会議」という住民ワークショップをやっています。きちんと話し合うという練習を丁寧にやっています。

住民同士の話し合いの中で、話し合いを円滑に進める役割は地域の若者が行っています。

この中でリーダーシップが育まれるようになっていきます。

●若者が参加する秘訣

”誘う”ということが、決定的に人が動くポイントになります。何回断られて

も、誘い続けることが重要なかもしれません。いろいろなつながりを持って、そのつながりが定着し、参加しやすくなります。

●活動を支える資源の集め方

国や県の委託金や補助金を活用しています。また、いろいろな視察や研修を受け入れ、受入料などで収益を上げています。活動資金を得る力を付けています。

まとめ

地域づくりの学び方の反省

地域づくりは先進事例から学ぶ場合が多いのですが、地域活動は解決すべき課題が地域によって異なり、また、NPOなどの市民活動と違って、町内会や自治会などの地域活動は対立する考えの人や活動に前向きでない人が混在する組織です。ですから、先進事例をマネすることはできないのです。その先進事例から汎用性（どこでも使えるようなノウハウ）を引き出すことが必要です。

第2回カレッジ ◆12月13日（金）
「きらりを語り合う」

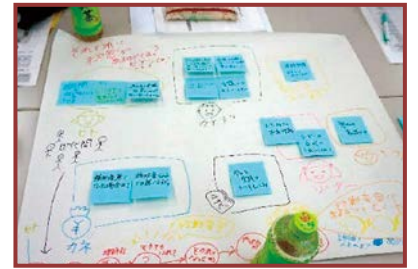
優れたリーダーとは

優れたリーダーの暗黙知には、一人ひとりの住民と丁寧に付き合うという行動、振る舞い方が存在します。

- ・丁寧に最後まで人の話を聞く
- ・できるかぎり、直接会う
- ・絶え間なく人に感謝の心を伝える
- ・約束と時間を守る
- ・相手に不満はあっても排除しない
- ・仲間の悪口を言わない
- ・相手の良いところを語る
- ・最後の後始末までする
- ・お世話になった人にお礼状を書く
- ・食べ物をおいしかったらごちそうさまでしたと言う

・些細なことでも事前に連絡する
このような細かい所作、振る舞い方の一つひとつの積み重ねが地域づくりのリーダーを作っています。





第2回のカレッジの目的は、第3回に向けて、“きらり”の若手リーダーへの質問をまとめることです。

今日のグループワーク

●皆さんのそれぞれの地域の現状、地域の困りごとを3つくらいに絞り込む

●その困りごとについて、“きらり”

ではどのように対応しているかテキストを読み込んで探し出す

●もう少し詳しく知りたいこと、聞きたいことを質問にまとめる

質問をまとめる

自分の自治会ではできていないことが“きらり”ではできている。自分の地域と比べると、“きらり”では地域愛が育っている。

“きらり”ではなぜ?どうして?と詳しく知りたいことをいくつかの質問にまとめました。

第3回カレッジ ◆1月10日(金)
「きらりの若手の思いを聴く」

第3回カレッジでは、山形県から“きらり”事務局の若手リーダー小形崇洋氏を招いて、第1回、第2回で“きらり”について学び、疑問に思ったことを質問します。

小形氏は、現在、“きらり”の教育委員会サブマネージャーとして、子どもからお年寄りまで各世代が参画するきらりの活動を支えています。



第3回カレッジの様子



第3回カレッジ

**Q：会議では、最初から皆が
発言していたのか？**

A：最初から発言していたのではない。発言しない人に意見を出してもらうために、“決めない会議”を行っている。出された意見は否定せずに、自分の意見をどんどん出してもらう。

Q：会議への参加のモチベーションは？

どうやって人を集めているのか？ どういう内容か？

A：会議は当たり前に行っている。きらりという組織にするまで3年、住民説明会を何度も行った。また、組織化されてからも、地区の現状を知るワークショップ、計画策定のためのワークショップなど会議の回数を重ねた。その積み重ねが今にある。事務局の若手が会議のファシリテーター役を担うが、一人一人発言をしてもらうよう心がけている。また、常勤事務局職員はあくまで説明側で、司会進行役は非常勤事務局でいろいろな人を回しながら務めてもらい、取りまとめもしてもらう。きらりの会議では、ほとんどの人が発言している。疑問や意見がありそうな人には、司会進行役が話を振り、意見してもらうように目配りしている。



**Q：会議に参加する人が増えて
いったというが、どうしてか？**

A：発言することが楽しいのだと思う。

会議の雰囲気もいいと思う。

意見交換や情報交換のための“決めない会議”でも、自分の発言した内容が次の事業に反映されたりする。自分の発言したことが通ると、自己効力感が得られる。



**Q：きらりの事務局の
スタッフの年齢構成は？**

A：職員として働いている常勤事務局員は、40代50代。非常勤事務局員の平均年齢は30代。非常勤事務局員は、本業の仕事を持ちながらきらりの活動に関わっている。きらりの場合は、きらりで働きたい、活動したいと申し出てくる若者がいる。その若者がきらりの活動や研修に参加し経験を重ねると、研修生から事務局員へステップアップできる人材育成の仕組みがある。事務局員になると金バッジがもらえ、一人前として見てくれる。



**Q：子どもを対象にした意見交換会を
行っているというが、**

それが将来的に、大人になってからの会議への参加につながっているのか？

そういったねらいで行っているのか？

A：“わんぱくキッズスクール”の事業で子どもを対象にした意見交換を行っている。この事業の当初の目的は、完全週休二日制に対応して、地域で子どもを育てようというものであった。その中で、地域の農産業を知り、地域を学んだ。それから約20年も事業を続けていると、そこで育った子ども達が、今大人になって吉島に戻ってきている。今までは、高校卒業後、地域の外に出てしまうと戻ってくることが少なかったのが、吉島に戻ってくる割合が増えている。この事業を運営する際、子ども達の意見も引き出したいということで、子どもを対象にワークショップを行っている。それが結果、大人になってからの参加にもつながっている。

Q：若手を事業の担い手として、どうやって確保したのか？

A：きらりにとって若手とは30代。私が平成14年に吉島地区に関わり始めた時から、同級生や後輩などの若者に声を掛け、地道に誘い続けた。楽しければ若者は参加する。また、若者の相談事に、高橋事務局長が親身に丁寧に対応し、若者を上手に巻き込んでいった。若者が頑張っていて活動していると、年配の方々も認めてくれ、評価してくれた。

Q：若者はゆるくつながることを重視しているのか？

A：実際、若者は忙しい。来れるときに来て下さいのスタンスの方が良い。

Q：若者だけでなく、習い事やスポーツクラブなどで子どもも忙しい。その忙しい子ども達が地域の行事に参加できるのか？

A：子どもの参加する活動は、他の子からうらやましがられるような活動にしている。スポーツ少年団よりも優先してきらりの活動に参加する子もいる。

リーダー育成に理解のある学校の先生が、5、6年生にきらりの事業に参加するよう促してくれる場合もある。

また、子どもの事業は、他の行事と重ならないように関係団体で調整会議を行うなど注意している。



Q：きらりでは若者が活躍している。

栃木県では60代以降の世代が組織の中心となっている。

小形さんのような若者を組織に引っ張ってくるにはどうしたらよいか？

A：どこにでも、必ず、地域づくりに関心のある若者はいる。せっかく若者が来ても、快く受け入れない団体もあるようだが、きらりは若者が来たら歓迎する。

きらりには若者を受け入れる環境がある。

若者が来たら、まずは先輩から声をかける。話をすることで、若者が感じている敷居はずっと低くなる。次に来たときは何か役割を与え、終わったら感謝の言葉を伝える。

次に会うときにはもう仲間になっている。



Q：住民の地元に対する愛着をどのように育てたのか？

A：きらりを設立する際、“自分の地域を見直しましょう”
“地域の課題を洗い出しましょう”

“地域の理想像を語りましょう”という住民ワークショップを行った。

地域を見つめ直し、情報を共有した。

また、吉島は小学校の出入りが他校と比べると比較的自由である。

どこの誰々というように、顔が見える関係ができており、

人のつながりがある。

NPO法人きらりよしじまネットワーク
教育部会サブマネージャー 小形 崇洋 氏
(おがた たかひろ) 平成12～13年度、山形県川西町職員として吉島地区公民館に配属される。平成14年度から地区住民として吉島地区社会教育振興会事務局に所属するが、NPO法人きらりよしじまネットワークに組織改編され、現在は、教育部会サブマネージャーとして活動する。



第4回カレッジ ◆ 2月14日(金)
「きらりの学びを地元で生かす」

第3回カレッジのふりかえり

第3回カレッジQ&Aをまとめた資料
を読んで、「きらり」から学べたことや
自分の地域で何をするかという行動や指
針を考え、各グループで意見交換しまし
た。

抽象的な事ではなく、具体的にどのよ
うなアクションを起こせば良いか、各々
の思いを話しました。



2019年のコミュニティカレッジは4回連続講座。他の地域の方とのたくさんの交流がありました





土崎氏

「違いを強みに変える」という視点で活動を進めることで、地域の中に新たな、そして多様な“参加”が生まれるかもしれません。そのことが、ひいては一人ひとりの市民社会づくりにつながるのです。

(抜粋)



『コーディネーションとは?』

コーディネーター流行りの昨今、いろいろなコーディネーターが存在します。

コーディネーションには「調整・協調・調和」という意味があり、日本ではそれをイメージする人も多いと思いますが、このほかにも「同等・対等・同格」という意味があります。

地域は様々な人で構成されています。昔から住んでいる人と最近引っ越してきた人、昼間働いている人とそうでない人、年齢や性別、家族構成の違い……。地域活動におけるコーディネーターには、そうした違いがある人同士を、単に同化することなく、違いの中にある差を埋めていくという役割があります。

「違いを強みに変える」という視点で活動を進めることで、地域の中に新たな、そ

コミュニティカレッジに参加して

- よしじまの取組だけでなく、県内各地で活躍している方と知り合うことができ、情報交換ができた。
- 第3回カレッジの小形さんの話は、組織をコーディネートされている立場からのリアルな話が多く、とても参考になりました。
- 人を集める事業が困難な状況が多々ありますが、ネットワークを生かした組織力の強化を図って行きたいと思いました。
- 行動することの楽しさを知りました。今までこのような講座に参加したことがなかったのですが、自治会の役員になったことで、参加してみたい!と思うようになれました。役員にならなかつたら、このような楽しさも吉島地区のことも知ることができなかった。
- 1回で終わらず、4回参加したことによって、コミュニティの問題点や理想が分かってきた。

私たちがコミュニティづくりに協力しています

県民・行政・企業の協働と社会貢献活動のお手伝いをします!

NPO 法人とちぎ協働デザインリーグ
TOCHIGI COLLABORATION DESIGN LEAGUE

みんなと育むまちづくりシンクタンク

とちぎボランティアNPOセンター「ぼ・ぼ・ら」管理運営団体
☎ 070-4288-7400



いきいきコミュニティライフ！

文 / 安藤 正知

「心に残る一言」

私の心に残る一言、それは「なせばなる」です。小3最後の授業で担任が大きく板書し、いつか意味がわかるよ、と教えて下さいました。正確には「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」だと知ったのはずいぶんあとになってからでした。

私は現在、NPO 法人や自治会などの活動に携わっています。本格的な関わりは約20年前に会社を辞めてからなので、いつの間にか会社員生活を超えるお付き合いとなりました。

企業と非営利団体にはもちろん共通点もあれば相違点もあります。たとえば「成長」「発展」「競争」「効率」・・・企業活動では日常的に使われるこれらの用語も非営利組織内ではあまり縁がない、もしくは違った角度から用いられます。企業の存在価値を語るうえで収益性は重要です。数字は目に見える分、利害関係者間で目標を共有しやすいと言えます。一方、非営利団体は市民社会創造や社会変革が重要となり、人々が共感でつながる必要があります。

ではどうすれば共感が得られるのか。まずは熱意、これを実現したいと思う人の熱い思いが人を惹きつけるからです。でもそれだけでは十分とは言えません。そこに覚悟が必要になります。つまり「この指とまれ」と言えるかどうか。共感の輪を広げるためにこの二つが大切だと私は考えます。というのも、営利・非営利、規模の大小に関わらず、駒の指し手になりたい人が多いと感じているからです。誰かに何かをしてもらう発想はある意味楽しいことなので、致し方ないかもしれません。でも他人は決して思い通りに動きません。思い通りになるのは自分だけです。社会を変える、を本気で実現したいのであれば、人任せにせず自らが率先すること、さもなければ「成らぬは人(自分)の為さぬなりけり」になってしまいます。

「為せば成る」の実践は容易ではありませんが、まずは私自身がこの教えを忘れずにいきいきコミュニティライフを目指したいと思います。

安藤正知(あんど まさとむ)

認定特定非営利活動法人宇都宮まちづくり市民工房 理事長
宇都宮市まちづくりセンター長

秋田市出身。化学品会社に16年勤務後退職し、2003年より宇都宮市民活動サポートセンター勤務、2005年NPO法人宇都宮まちづくり市民工房設立に関わり、2019年理事長就任、市民主体のまちづくりを目指して調査研究、まちづくりの実践を行っている。2012年1月宇都宮市が開設した宇都宮市まちづくりセンターの指定管理者としてその管理運営に携わる。



つっちー おすすめ!



◆書籍紹介◆

『はじめての地域づくり実践講座… 全員集合!を生み出す6つのリテラシー』

石井大朗・霜浦森平 編著
北樹出版

突然ですが、皆さんが暮らしている、あるいは活動をしている地域やコミュニティはどんなところでしょうか。その実態を正しく、客観的に誰かに説明することは案外難しいかもしれません。「正しく」は言うまでもありませんが、ここで言う「客観的に」とはデータを用いることだけでなく、説明する人の立場や生活歴等にかかわらず、そこに内在する多様性をいかに示すことができるか、と捉えてみます。

本書では、人口減少時代の地域づくりに必要な視点と手法を「6つのリテラシー」と名付け、実例をもとに解説しています。一例を紹介すると、これまでの人口データを基にした未来の見通し方、地域住民の主体性の育み方のプロセス、地域資源を生かしたまちづくり・むらおこしの手法など。地域づくりにおけるリーダー論や組織論にも言及しています。地域づくりでお悩みを抱える方ももちろんのこと、「これから何か始めてみよう!」とやる気満々な方にもおすすめです。そして、できれば仲間同士(複数人)で感想や疑問を共有しながら読み進めていただきたい一冊です。

地域やコミュニティのことを正しく、客観的に誰かに説明することは、その構成員一人ひとりの思いに寄り添い、「これからの地域づくり、どうする?」を考えることにつながります。地域の未来に思いを馳せつつ、今、できることを考える一助になれば幸いです(紹介者の土崎も本書に著者の一人として少しだけ登場しています)。

土崎 雄祐 (つちざき ゆうすけ) 秋田県生まれ。これまでに NPO 法人職員や大学教員として学生向け地域志向科目や市民向け講座のプログラム開発、自治体職員研修の企画立案支援などに従事。認定 NPO 法人宇都宮まちづくり市民工房常務理事、(一社)とちぎ市民協働研究会専務理事など

「心ふれ合う明るく住みよい地域社会を実現していくために」

賛助会員を募集しています

心ふれ合う明るく住みよい地域社会を実現していくためには、地域住民による自主的・主体的な活動が大切です。

栃木県コミュニティ協会は、住民自らの創意と工夫によるコミュニティづくりを県民運動として全国的に推進し、活力と潤いのある生活の場を築きあげることを目的とし、昭和63年に設立されました。

住みよい地域社会の実現のために、地域づくりに必要なリーダーの養成をはじめとする各種事業を行っています。今後さらに事業の充実を図るために、協会の趣旨を御理解いただき、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

団体賛助会員のご紹介

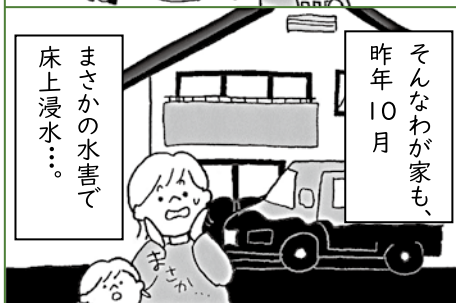
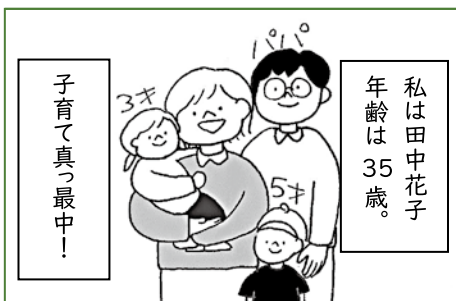
〈50音順・敬称略〉

宇都宮ヤクルト販売 株式会社
学校法人 愛泉学園
株式会社 井上総合印刷
株式会社 オータニ
株式会社 松井ピ・テ・オ・印刷
株式会社 リメック

滝沢ハム 株式会社
「小さな親切」運動栃木県本部
中央労働金庫栃木県本部
栃木県資産管理協会 株式会社
フタバ食品 株式会社



いざという時



▼ 講師・助言者派遣 ▼

当協会では、会員及び市町等が主催するコミュニティに関する講演会又は集会に対して講師・助言者等を派遣することにより、コミュニティづくりの推進と活性化を図っております。講師派遣を希望する団体は、協会までご連絡ください。

▼ 令和2年度 総会・研修会 ▼

日 時：令和2（2020）年5月26日（火）

13：00～15：30

会 場：栃木県庁東館 4階講堂

講 師：萩原 なつ子 氏

（立教大学社会学部/大学院 21世紀社会デザイン研究科 教授）

演 題：「男女協働で“きらり”と光るまちづくり」

■ 編集後記 ■

2015年の国連サミットにおいて、SDGs（持続可能な開発目標）を達成することが国際社会共通の目標とされた。一方、日本の新元号は、世界が調和され、平和が永遠に達成されるという願いを込めて「令和」と決定されたという。こうした目標や願いを実現するためには、地域コミュニティの果たす役割は重要であり、その維持向上は世界共通の課題でも考えられる。

日本では高齢化、グローバル化が急速に進み、これまでの地域コミュニティを維持させることが困難になりつつあるが、これを逆手にとって若者、女性、外国人など地域を支える人材を育て、新たな地域課題に取り組むことで時代の変化に対応できる地域コミュニティが形成されることを期待して止まない。（まつ）

CONTENTS

- 02 講師・助言者派遣事業
- 04 コミュニティカレッジ 2019
- 12 いきいきコミュニティライフ！
- 13 書籍紹介
- 14 お知らせ

発行：栃木県コミュニティ協会
〒320-8501
栃木県宇都宮市埜田 1-1-20
栃木県県民生活部県民文化課内
TEL 028-623-2110 / FAX 028-623-2121

